日本行動計量学会
会報
第32号
1983年11月7日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

多様性、調和、統一、共存

上笹　恒

最近、生物の進化をめぐっていろいろと興味ある考え方が提起されているが、なかでも私にとって関心があるのは進化の機構はもとより、進化の定向性、生命現象の合目的性の議論である。

先日、「行動計量学」誌の第10巻第2号が配布され、頁をめくっていると編集委員の気配りによるのか、創刊号からの論文のテーマなどが集録されているのに気づいた。研究会として早くから発足し学会になってからもう10年になる日本行動計量学会の歩みが、具体的な成果として和文誌・欧文誌に掲載された多くの論文に反映されているわけで、ある種の感慨とともに興味深く拝見した次第である。

もともと直接的に人間行動の計量化に興味・関心とさまざまな動機をもった、かなり広い範囲にわたる研究者の寄り合い所帯として出発したわが学会も、有機体の一つであるからそれは生きていて、代謝活動を行いながら絶えず変化しているものと思われる。ただ、別の領域の学術誌をみていると、かなり早いペースで話題になっている研究主題が、いわば植物の生態系における遷移現象のように変化していくのも目につく。それらと比較すると当学会の場合はかなり安定しているようにも思われる。

そこで、有機体の進化の段階としてみたとき、当学会がどのような所に到達しているのかを顧みることも意味のあることではないかと思うのであるが、実際には私にとってこの判断は極めてむずかしく、外面的な学会発表や学会誌の論文の傾向だけからでは明瞭な方向性は読み取れないように思う。

しかしながら、有機体の進化は構造の変化、機能の特殊化、それらの統合化、という動的な過程を経て、より高度なレベルでの複合性を増す方向へ展開していくようであるので、われわれの学会もこんな観点から見たらどうなるだろうかと思ったわけである。

ところで、たまたま私は欧文誌の編集幹事を仰せつかっている関係で、さまざまなタイプの論文に出会い、著者と審査者との間を仲介してそのやりとりを体験しながら自分自身かなり啓発されるところが多い。その中で感ずることは行動計量学といった学際性の顕著な分野では、メンバー相互間の意思疎通がうまくいくような配慮が当然なされなければならないわけで、この立場から判断すると、論文の書き方も若干の制約を受けるだろうということである。同じ人間を研究対象としていても、著者の主たる分野の研究コミュニティーにのみ準拠して、その文脈において書く場合とは表現の仕方が異なってくるのではないかと思われる（このことは著者のみならず審査者にもあてはまることだが）。

しかし、このような問題は形式的な側面であるからそれほど気にしなくてもよいことかも知れない。要は、すでに述べたような性格をもつ当学会のような組織体は、多様性の中にもある種の調和と統一があって、しかもメンバーが相互に常に新しい刺激を受けながら交流をもち相互補完的に共存でき、実質的な意味において学際的研究が可能となる組織に熟成させていけたらと思うのである。

いろいろな興味や関心、動機づけ、現象解析の視点、分析・解析の方法論などがぶつかりあう波打ち際には、きっと新しい何かが出てきそうな気がして、また、もっと長期的に見てわが学会がどのような方向に進化していくのかを想像して、大いに期待したいところである。

（日本行動計量学会・理事。筑波大学哲学・思想学系・助教授）

第十一回大会報告

実行委員長　木下冨雄

第十一回日本行動計量学会大会は、九月一、二、三日の三日間、京大会館で開催されました。

今回の大会では、行動計量学会発足の原点に立ち戻り、学問分野を超えた共通の方法論の解明に焦点を合わせるよう、努力を尽したつもりです。

個人発表の区分も、その趣旨を生かして、できるだけ方法論的に共通な研究を一室にまとめてみました。それぞれの学問分野固有の用語や概念がつかめなくて、最初のうちは戸迷いを感じられたのではないかと思いますが、それを乗り越えて相互に扶け合い、理解し合うことが、学際的な本学会の良さではないでしょうか。

またパネル・ディスカッションも、同じ趣旨から、あらゆる学問分野に通じると思われるテーマを選びました。「系の安定性とはなにか」というのがそのタイトルです。

講演も室伏靖子氏の「チンパンジーにことばを教える」と、岡田節人氏の「発生工学と動物の形質発現」の二つを用意しましたが、これも方法論的に興味が持たれるということでお願いしました。

最初の意気込みが期待通り達せられたかどうか、私どもには自信がありませんが、大会を盛りたてて頂いた発表者、参加者の皆様、快よく出演を応諾して頂いたゲスト・スピーカーの先生方、それに何かと援助して頂いた学会本部や前年度の実行委員会、素晴しい祝辞を頂いた京都大学総長先生に、この紙上をお借りして、厚く御礼申し上げたいと思います。

大会事務局報告

1, 実行委員会の構成

木下冨雄（教養部）を実行委員長として、秋山哲一（工学部）、江島義道（教養部）、福田市朗（教養部）、片井修（工学部）、小林正美（工学部）、室伏靖子（霊長類研）、中村泰人（工学部）、西川禘一（工学部）、佐和隆光（経済研）、吉村浩一（教養部＝当時）の十一名で、実行委員会を構成しました。

2, 大会参加者数

正会員一六五名、準会員二一名、非会員（招待者を含む）三二名、賛助会員三名の合計二二一名。

3, 発表件数と各室別出席者数

個人発表の総数は六四件でした。各セッション別の発表件数と出席者数の概要を次表に示します。

セッション名		発表件数	出席者数
第1日	A 尺度構成法	五	二五
	B コトバの計量	四	一五
	C 社会調査の多変量解析	七	四五
	特別講演	(二)	九〇
第2日	D 数量化の理論と応用	五	五五
	E 世論調査法・データ収集法	六	七五
	F 医学データの多変量解析	六	二五
	パネル・ディスカッション	(六)	一一〇
第3日	G パターン認識	五	三〇
	H 環境・コミュニティ調査における計量	六	二五
	I 多変量解析の理論と応用	六	三〇
	J 医療のモデル分析	五	二〇
	K データ解析法	四	二五
	L 人間行動のモデル分析	五	二〇

4, 懇親会

会場近くのフランス料理店を借切って懇親会を開きました。参加者は総数五一名（招待者三名を含む）という盛況でした。

5, 展示室

大会の初めての試みとして、会場内に書籍や教材の展示・即売室を設けましたが、宣伝不足もあって、思ったより来室者が少なかったようです。

6, 広告・寄付

これも初めての試みとして、プログラムに広告を募集しましたが合計一四件の広告が寄せられました。また大会賛助金を、五つの機関から頂きました。紙上を借りて御礼を申し上げます。

7, その他

今回の大会運営から、大会は凝ろうと思えばいくらでも凝れる、しかし省エネ化しようとすればそれもかなり可能であることを学びました。どの大学や機関でも大会開催を気軽に引受けて頂くためには、後者のノウハウが大切だと思います。会員への通信文、依頼状、原稿の書き方など定型的な文書類は、今後フォーマットを決めてフロッピーにでも入れてしまい、学会の財産として次々伝えていく時期に来ているのではないかと感じました。

最後に、明年度の大会の成功を心から祈って報告を終えます。

第十一回日本行動計量学会総会

五十八年九月一日・於京大会館

〔挨拶〕

一、開催校　澤田敏男京大総長

二、学　会　林　理事長

〔報告および議事〕

（議長・生澤雅夫氏）

一、事業報告

和文誌編集幹事会　池田理事

欧文誌編集幹事会　松原理事

運営委員会　鮑戸理事

刊行物委員会　松原理事

決　算　事務局

二、会計監査報告　開原監事

三、次期理事・監事一覧及び承認

四、昭和五十八年度事業計画　林理事長

同予算案提案及び承認

〔大会実行委員長挨拶〕　木下委員長

新理事会スタート
新理事・監事、決定さる

第十一回大会総会で、左記の方方が新しい理事・監事として承認されました。任期は二年間です。

（アイウエオ順）

【理事】

鮑戸弘（東大文）、浅野長一郎（九大理）、○阿部裕（阪大医）、池田央（立大社会）、○生澤雅夫（阪市大文）、岩坪秀一（大学入試センター）、印東太郎（カリフォルニア大）、丘本正（阪大基礎工）、奥野忠一（東理大工）、上笹恒（筑波大哲学思想）、○河口至商（北大工）、木下冨雄（京大教養）、○京極純一（東大法）、○久保武士（筑波大医）、○後藤昌司（塩野義製薬）、駒澤勉（統数研）、○芝祐順（東大教育）、竹内啓（東大経済）、○戸田正直（北大文）、○納谷嘉信（大阪電通大）、○西田春彦（東北大文）、○野元菊雄（国語研）、林知己夫（統数研）、○肥田野直（大学入試センター）、古川俊之（東大医）、松原望（筑波大社工）、○丸山久美子（盛岡大）、水野欽司（統数研）、柳井晴夫（千葉大文）、脇本和昌（岡山大教養）

（以上三十名。○印は推薦理事）

【監事】

開原成允（東大医）、宮原守男（虎の門法律事務所）（以上二名）

会議議事録

○理事会

日　昭和五十八年七月三十日

於　統計数理研究所

出席者　理事・八名

1 野元理事から組織検討小委員会の答申があった。会則の見直しについては答申案に沿って新理事会で引続き検討し、来年の総会に提案することとした。また細則・内規の作成をあわせて行うこととした。

2 事務局作成による、昭和五十七年度決算ならびに五十八年度予算案を承認した。

3 各種委員会報告

池田理事、松原理事よりそれぞれ和文誌、欧文誌の刊行進捗状況についての報告があり、鮑戸理事より運営委員会の活動について報告があった。また、行動計量学シリーズは新体制で刊行に努力することになった旨の報告が、岩坪・松原両理事からなされた。

4 外国人会員制度については、学会としての態度を早急に決めるべく引続き検討することとした。

○理事会

日　昭和五十八年九月一日

於　京大会館

出席者　理事・十一名

1 林知己夫氏を理事長に選出し、ついで各役割分担を決めた（結果は本ページ上段）。各種委員会委員は当該担当理事を中心になるべく早い時期に決め、次回理事会（十二月予定）にて承認を求めることとした。

2 外国人会員制度については、前向きの意見が多かったが、なお慎重意見もあり、次回理事会まで決定を延ばすことになった。

3 学会活動の将来計画について意見を交換した。

〈林知己夫氏を理事長に選出〉

九月一日の新理事による第一回理事会で、林知己夫氏がひきつづき理事長に選出されました。

また、各会務の担当理事が左記のように決まりました。

〈編集委員長〉　野元理事

〈和文誌編集幹事長〉池田理事

〈欧文誌編集幹事長〉上笹理事

〈運営委員長〉　駒澤理事

〈刊行物委員長〉　肥田野理事

〈対外活動担当〉　古川理事

〈関西担当〉　生澤理事

〈学会担当〉　柳井理事

〈庶務担当〉　水野・岩坪理事

◇◇◇◇ 昭和五十七年度決算 昭和五十八年度予算 ◇◇◇◇

第十一回大会総会（京大会館）で57年度決算（5ページ）と58年度予算（6ページ）が承認されましたので報告いたします。

昨年度決算は、日本学会事務センターに業務の一部を委託してはじめてのものでしたので、どのような結果が出るか心配しておりました。しかし、ふたをあけてみると会費の納入が良好だったために約二九九万円（未刊の和文誌10巻2号の予想価九〇万円を含む）を本年度に繰越すことができました。

会員各位の御協力の賜物です。ありがとうございました。

また会計監査では、お忙しいなか、監事の宮原守男（虎の門法律事務所）、開原成允（東大医）の両氏にお世話になりました。あつく御礼申上げます。

本学会の予算額も、本年度からいよいよ一千万円の大台を越えました。学会は満十周年を迎え、次の新しい十年に向って船出をしたばかりです。学会の一層の発展と円滑な運営のために、会員各位の心からの御支援をお願い申上げる次第です。

（事務局担当・岩坪秀一）

□昭和五十七年度決算への注記

（決算書は5ページに掲載）

注1　予算内訳
- 正会員　五千円×六八〇人
- 準会員　三千五百円×百人
- 賛助会員三万円×三十三口

注2　正会員　七四六、三一〇円
準会員　三一、二〇〇円

注3　五十六年度未発行の分

注4　未発行

注5　月例第30回　一万五千円
月例第31回　二万円
第2回関西懇話会　二万円

注6　和文誌幹事会　四万五千円
欧文誌〃　八万七千四百円

注7　第10回大会受付

注8　日本学会事務センター発送分　六一〇、一七〇円
事務局一般通信費　一一六、四四五円

注9　事務局旅費（東京↓京都。11回大会実行委員会出席）

注10　理事会3回五一、四〇〇円
運営委員会3回　二七、四〇〇円

（注記・以上）

◉会議記録◉

○運営委員会

時　昭和五十八年九月二日
所　京大会館
出席者　運営委員　十八名

1、九月一日の新理事会で、次期の運営委員長に駒澤勉理事（統数研）が選出されたことの報告と紹介があった。

2、月例シンポジウム、講習会、小グループ研究会、会報などの活動報告がされ、承認された。

3、講習会およびシンポジウムの運営方針、講師謝礼、開催場所などについて討議した。

4、次期運営委員会への申送りが月例シンポジウムの予定、各地会員からの情報連絡体制、小グループ研究会のバックアップなどを中心に行われた。

○運営委員会準備会

時　昭和五十八年九月二十一日
所　統計数理研究所
出席者　新運営委員長および旧運営委員幹事、計六名

話題　次期運営委員会では、①委員は地域ブロック・専門分野を考慮して委嘱することとし、従来よりやや減らし二十名程度とする、②各種の会務は固定的な分担制によらず、そのつど担当委員を定めて進める、③委員会は隔月一回（年六回）、定期的に開く、という駒澤委員長の方針が示され、これに基づいて新委員の候補人選が進められた。

○運営委員会

時　昭和五十八年十月二十日
所　統計数理研究所
出席者　運営委員長および新委員

予定者十一名。なお新委員は当日欠席の八名を含め、次回の理事会で承認を受ける予定。人選にあたっては地域・分野別を考慮した。

1、新運営委員の自己紹介

2、幹事役の人選

3、委員会の方針。①偶数月第三木曜日に定例委員会を開催する。②会報担当幹事の杉戸氏（国語研）以外の会務は委員会全体があたる。③月例シンポジウムは最低年四回、計画的に行う。④講習会は従来の形式の他に、泊り込みのセミナー等を企画する。

4、月例シンポジウムの予定（第34、35回。7ページ参照）の報告と、今後の開催企画についての討議をした。

昭和57年度　会計決算　　昭和57年4月1日～昭和58年3月31日

収入	決算	予算	増減
前年度繰越金	2,351,204円	2,351,204円	0円
学術定期刊行物補助金	770,000	770,000	0
57年度学会費	5,053,500	4,740,000	313,500
正会員5,000円×791人	3,955,000	3,400,000 (注1)	555,000
準会員3,500円× 91人	318,500	350,000	△ 31,500
賛助会員30,000円×26口	780,000	990,000	△ 210,000
他年度学会費（注2）	777,510	400,000	377,510
学会誌売上金	390,960	400,000	△ 9,040
大会講習会決算残高	117,362		117,362
第14回講習会	7,080		
第10回大会	110,282		
抄録集等収入	50,100		50,100
預金利子	93,430	200,000	△ 106,570
計	9,604,066円	8,861,204円	742,862円

支出	決算	予算	増減
学会誌製作費	4,132,900円	5,328,600円	△1,195,700円
和文誌9巻2号（注3）	896,700	900,000	△ 3,300
〃 10巻1号	908,200	900,000	8,200
〃 10巻2号（注4）	0	900,000	△ 900,000
欧文誌 №12	1,390,000	1,314,300	75,700
〃 №13	938,000	1,314,300	△ 376,300
月例会費用	55,000（注5）	90,000	△ 35,000
各種委員会活動	132,400（注6）	250,000	△ 117,600
学会事務委託費	1,094,712	1,200,000	△ 105,288
管理費	60,000	60,000	0
発送手数料	823,457	832,700	△ 9,243
漢字処理加算費用	71,215	93,000	△ 21,785
新入会員・異動処理	114,400	176,000	△ 61,600
その他	25,640	38,300	△ 12,660
人件費	35,400（注7）	150,000	△ 114,600
印刷費	299,380	400,000	△ 100,620
通信費	726,615（注8）	700,000	26,615
消耗品費	3,450	50,000	△ 46,550
交通費	20,000（注9）	10,000	10,000
会合費	78,800（注10）	100,000	△ 21,200
雑費	34,035	15,000	19,035
予備費	0	567,604	△ 567,604
次年度繰越金	2,991,374		
計	9,604,066円	8,861,204円	742,862円

昭和58年度　予　算

収　入	58年度予算	57年度実績	備　考
前年度繰越金	2,991,374円	2,351,204円	
学術定期刊行物補助金（注1）	770,000	770,000	（注1） 内定額
58年度会費	5,520,000	5,053,500	
（正会員 5,000円×800人	（4,000,000	（3,955,000	
準会員 3,500円×100人	350,000	318,500	
賛助会員30,000円× 39口）	1,170,000）	780,000）	
他年度学会費	700,000	777,510	
学会誌売上金	400,000	390,960	
預金利子	100,000	93,430	
計	10,481,374円		

支　出	58年度予算	57年度実績	備　考
学会誌製作費	5,328,600円	4,132,900円	（注2） 57年度未発行の分
（和文誌10巻2号（注2）	900,000	9巻2号，10巻	
〃 11巻1号	900,000	1号 計	
〃 11巻2号	900,000	1,804,900	
欧文誌 №14	1,314,300	№14，15計	
〃 №15）	1,314,300）	2,328,000）	
月例会費用	100,000	55,000	
各種委員会活動	250,000（注3）	132,400	（注3） 小グループ活動資金50,000円を含む
学会事務委託費（注4）	1,260,000	1,094,712	（注4） 日本学会事務センター
（管理費	120,000（注5）	60,000	（注5） 58年度より値上げ（これまで60,000円）
発送手数料	832,700（注6）	823,457	（注6） 年8回発送
漢字処理加算費用	93,000（注7）	71,215	（注7） 会費請求書ならびに宛名代
新入会員・異動処理	176,000（注8）	114,400	（注8） 新入会員70名 異動会員200名
その他）	38,300（注9）	25,640	（注9） 事務連絡費，コピー代等
人件費	60,000	35,400	
印刷費	300,000	299,380	
通信費	750,000	726,615	
消耗品費	40,000	3,450	
交通費	10,000	20,000	
会合費	150,000	78,800	
雑費	50,000	34,035	
選挙費用	76,800（注10）		（注10）印刷費のみ
名簿作成費	757,700（注11）		（注11）学会事務センター見積り（会員1,060名分）
積立金	1,200,000（注12）		（注12）定期預金
予備費	148,274		
計	10,481,374円		

国際会議開催のお知らせ

▲当学会も協賛学会の一つとなっている「第十二回国際計量生物学会議」が、昭和五十九年九月二日（日）から九月八日（土）までの七日間、東京で開催されます。

テーマは、生物データに対する数学モデルのあてはめ、統計的生態学、生物学・医学における確率過程、臨床試験の設計・実施・解析、多次元分割表・カテゴリカルデータなど。発表申込みおよびアブストラクト提出の期限は、それぞれ昭和五十八年十一月末、昭和五十九年一月末です。問合せは、

〒162 東京都新宿区神楽坂一―三
東京理科大学工学部経営工学科
奥野　忠一教授
電〇三―二六〇―四二七一まで。

▲「第一回ファジィ情報処理国際会議」が、昭和五十九年七月二十二～二十六日の期間、ハワイで開催されます。

発表論文締切は五十九年三月一日です。問合せ先は、

〒591 堺市もず梅町四―八〇四
大阪府立大学工学部経営工学教室　浅居　喜代治教授
電〇七二二―五二―一一六一

開催のお知らせ
第三十五回月例シンポジウム
第四回行動計量関西懇話会

日時　昭和五十八年十二月十日（土）
　　午後一時半～四時半
場所　大阪市立大学一号館二階
　　（国鉄阪和線杉本町下車）
主題　多次元定性データの解析
オーガナイザー　田中豊（岡大）
司会　生澤雅夫（大阪市立大）
発表〇順序カテゴリーデータの解析　辻谷将明（岡山商大）
　〇対数線型モデル　森川敏彦（武田薬品）
　〇数量化法におけるinfluential observationsの評価　田中　豊（岡山大）

第七回人間工学基礎技法講習会
開催のお知らせ

日時　昭和五十八年十一月二十五日（金）～二十六日（土）
場所　家の光ビル（第二会議室）
　　東京都新宿区市谷船河原町11（国電・地下鉄飯田橋）
主題　やさしい官能検査
参加費　一般二五〇〇〇円
問合せ　日本人間工学会事務局
〒170 東京都豊島区東池袋一―九―三（電九八七―一八七八）
十一月十四日（月）までに。

医学生のための行動計量学セミナー
開催報告

本学会主催の医学生のための行動計量学セミナーが、八月四日から六日まで神戸市北区の関西地区大学セミナーハウスにて、井上通敏（阪大）・梶谷文彦（川崎医大）両氏のお世話で開催されました。

本セミナーは、昭和五三年十二月に次いで二回目で、今回は北海道から九州まで十八大学から三十四人が参加しました。

講師は十一人で、以下のような講演が行われました。「科学と数学」林知己夫氏、「臨床医学の数理とその発展」井上通敏氏、「生体現象のモデル化」梶谷文彦氏、「システム理論入門」楠岡英雄氏「医学生のための統計学」米虫節夫氏、「生体計測とその数理的背景」北畠顕氏・友永轟氏、「診断と治療の数理」駒澤勉氏・堀正二氏、「長期臨床試験」楠岡英雄氏「予防医学と疫学」小町喜男氏、「医用データベースと知識工学」稲田紘氏。

二泊三日のセミナーでしたが、参加者は皆熱心で、講演の終了した後も深夜まで討論する姿があちこちで見られました。

なお、テキストの残部が若干ありますので、希望者は学会事務局までお問い合わせ下さい。

◉夏期講習会（第15回）の記録

日時　昭和五十八年八月六日～八日（二泊三日）
場所　富士教育研修所（裾野市）
テーマ「多変量解析の諸問題」
世話役　中谷和夫（東大）
講師　中谷和夫（東大）
　黒須正明（日立中央研）
　村上　隆（名大）
　石塚智一（鉄道労働科研）
参加者　二十一名
（詳しい報告は次号掲載予定）

◉第34回月例シンポジウムの記録

日時　昭和五十八年十一月一日
　　午後一時半～五時
場所　国立国語研究所・研修室
テーマ「言語行動の計量的研究」
司会・オーガナイザー
　江川　清（国語研）
発表　高田　誠（国語研）
　米田正人（国語研）
　楠見　孝（学習院大）
　村上征勝（統数研）
参加者　四十一名

＜海外の行動計量学事情＞
ペルーと南米での見聞

林　峻一郎

ペルー国の最大の日刊新聞である「コメルシオ」の報知欄に、次のような小記事を目にしたのは、正直に言って、二年間にわたる私の滞在中の最後の頃であった。

生物数学の討論会

ラテンアメリカ生物数学協会はトクマン（アルゼンチン）でこの分野での第2回講習会を行うが、この際、わが国のサンマルコス国立大学主任教授エミリオ・イスラ・クルサード博士が「カテゴリーの理論」について講演を行う。

この記事をみたとき、私は一瞬呆気にとられた。「生物数学」とは奇妙な訳であるが、原語はBio-matematicaである。大体の感じでは、これが探し求めていたものといえる。その時まで、私はかなり根気よく、行動計量学ないしそれに類するものを聞きまわっていたのである。私が聞いた相手は、各大学の心理学、社会学、さらには精神医学者や疫学者たちであった。残念なことに、彼らの返事は、この国にはそのようなものが存在しない、というものであった。

実際、現地で散見した論文類では、統計はかなり使われてはいるものの、多くは単純・クロス集計、さらに因子分析をいくらか試みている程度であった。また、カトリック大学や国立統計院などはかなり大型のコンピューターを備えてはいるが、その操作費用やプリントアウトの紙代などの費用が捻出できず、国家統計ですら思うにまかせない。また、パンチミスの多いデータ作成過程など、信用しがたい程度の教育訓練である。もちろん、これほど貧困な社会ではあったが、やはり新しいものへの興味は常に存在している。コンピューターを勉強したがる若者は多い。その一人は私の持参したマイコンを使ってカレンダーなどを作って楽しんでいた。

ペルーは南米でも二級の国であり、おそらく、ブラジルは優に欧米に次ぐ力をもっているだろうしアルゼンチンもかなり有力である。しかし、なかなか情報が入手できないのも、途上国の実情であった。冒頭の新聞記事をもとにさらに探ろうとしても、その時間がなかったのは残念である。

要するにペルーおよび周辺の南米各国は、この分野の試みはあるに違いないが、実際どこまで行われているかは疑問の、これからの国々と言えるであろう。

（日本行動計量学会会員。慶應義塾大学医学部）

会員の声

杞憂

中島雄次郎

教育者にとって「間違いをおこさせないためには、どのような情報を与えるべきかというノウ・ハウ」がわかったらすばらしいこと。

だが……行動計量によってえられた一般法則をもとにして、遺伝的・環境的に一人ひとり異なった五〇人の生徒に、それぞれの個性を伸すのに適した情報を与え、望ましい（期待どおりの）行動を起こさせることができたら……これは個別教育の夢。だがだが、このようにしてヒト・人間の行動の過程がすべて解明されていったら、そしてそのノウ・ハウがもし、一にぎりの為政者の手に握られていったら—オーウェルの一九八四年がやってきはしないか？

環境教育の講義ノートをつくりつつ、環境問題について生徒にどのような行動を期待するか、そのための教材は、そして成果の測定・評価は、と考えている。そのさなか、第31号の「行動計量学の行方」を読んで少し心配になった。たぶん杞憂ではあろうが。

（日本行動計量学会会員。日本大学理工学部非常勤講師）

事務局から

事務局の住所と電話番号が一部変更になりました。

新住所　〒一五三
東京都目黒区駒場二—一九—二三
大学入試センター研究部内
電　〇三—四六八—三三一一

事務局（大学入試センター内、事務局担当・岩坪秀一）への問合せは、なるべくハガキか封書でお願いします。特に本年十一月から来年三月までは共通一次試験の関係で忙しくなります。

なお入退会・異動の受付先は、日本学会事務センター（〒113東京都文京区弥生二—四—一六。学会センタービル内。日本学会事務センター日本行動計量学会係）ですのでご注意下さい。